



写真左から、藤原、鈴木、安達(睦)、千枝、武川、鈴木、三上、北浦、安達(海)

全国中学生空手道選手権大会出場

男子個人組手  
千枝紘(佐沼中3年)

男子団体組手  
佐沼中(千枝紘(3年)・武川史穂(3年)・安達睦人(2年)・鈴木零土(2年))  
中田中(鈴木陽翔(3年)・三上瑛大(3年)・北浦心太(1年))

「それぞれの舞台へ」

全日本少年少女空手道選手権大会出場  
5年男子組手 藤原賀空(新田小)  
6年男子組手 安達海葵(佐沼小)

全国中学生空手道選手権大会の男子個人組手の部に、千枝が2年連続で出場。昨年は初戦敗退したが、今年は序盤から畳み掛け、7対1で全中初勝利を手にした。2回戦も中盤まではリードするが、終盤守りに転じてしまい敗戦。「勝てる相手だったのに、最後に弱気になってしまった」と唇をかんだ。

団体の部に出場した佐沼中が初戦で対戦した埼玉栄中(埼玉県)は、全国屈指の強豪で、くしくも大会1カ月前に練習試合をした相手。練習試合では互角だったが、先鋒の千枝が4対9で敗れ、後がなくなる。中堅安達はリードされたまま残り数秒に、誰もが諦めかけた瞬間、残り2秒で上段蹴りが決まり引き分け。大将武川に望みをつなぐ。勝つためには6点差以上の勝利が条件。その焦りから本来の実力を発揮できずに敗戦。3年生の千枝と武川は「高校では必ず全国上位進出を果たす」と前を向いて歩を進める。

中田中は、県大会準決勝で全中を懸け、昨年敗れた東北学院中と対戦。1勝1敗となり、全中出場は大将北浦に託された。プレッシャーがかかる場面にも動じず、接戦を制

し勝利。全中への切符を手にした。全中では、シードで2回戦から登場。先鋒鈴木は緊張から動きが硬くなるが、技が決まりだすと落ち着きを取り戻して勝利。続く三上も得意の突きが決まり、初戦を突破した。続く3回戦も勝利し、8強入りを懸けて臨んだ4回戦。カウンター主体の相手に惜しくも敗戦し涙をのんだ。

全日本少年少女空手道選手権大会は、藤原が初出場。藤原は「全少に出場できてうれしかった。とにかく全力を出すことが目標」と強気で挑むが、攻撃が単調になったところを攻められ初戦敗退した。

「全少で勝つために基本の稽古を頑張った」と話す安達は、積極的に攻め、1回戦、2回戦を突破。続く3回戦では、序盤にリードを許し、一時は同点に追い付くが、惜しくも敗れた。大会を終え、藤原は「全力は出せた。来年も必ず全少に出場して今度は勝ちたい」と胸を張り、安達は「来年は中学で兄と一緒に全国大会で活躍したい」と新たな一歩を踏み出した。

空手家たちは、それぞれの舞台での活躍を拳に誓い、今日も強く握り締める。



「頂点への希望」

全日本少年少女空手道選手権大会  
小学1年女子組手 5位入賞  
加賀野小

保科希咲  
Hoshina Nozomi

「全少で入賞できたことはうれしかったけど、負けたのが悔しい」。あどけない表情とは裏腹に負けん気をのぞかせた。

全日本少年少女空手道選手権大会小学1年女子の部に出場した保科は、自身初の全国大会の舞台で5位入賞を果たした。

兄と姉が空手をしていただけではなく、家でも父親に見てもらいながら自主稽古に励んだ。時には泣きだしてしまふこともあったが、決してやめようとはせず、ひたむきに努力を続けた。

保科の持ち味は、高い身体能力を生かしたスピード。相手の攻撃に対して瞬時に反応し、技を出すのが難しい体勢からでも素早く攻撃を仕掛けることができる。県予選では、順調に勝ち進み、全少出場を決めるが、自分から攻めることが少ないという課題があった。そのため、積極的に攻めることを心掛けながら、以前にも増して稽古に打ち込んだ。

迎えた全少当日「人が多くて緊張した」という保科だが、試合では持ち前のスピードで相手を翻弄し、稽古で磨いた攻めで圧倒して勝ち進んだ。

4回戦の相手は、優勝候補の吉福百葉(大阪府)だったが、気負うことなく試合に臨み、ポイントを先制。その後逆転されるが、得意の上段蹴りでリードを取り戻した。終盤に追い付かれ、同点のまま制限時間を迎えるが、ポイントを先取した保科が勝利。大方の予想を覆し、見事金星を挙げた。

優勝候補に勝利し、優勝への期待が膨んだ直後の準々決勝、身長が高く手足が長い相手に苦戦を強いられた。長いリーチをくぐり抜けて技を決めるが、3対6で敗戦。その試合の勝者が全国1位となった。「悔しかったけど、お父さんに『頑張ったね』って言ってもらえたのがとてもうれしかった。自分のスピードは全国でも通用すると思った。これからもっと稽古して、来年こそは絶対に優勝したい」。

優勝という夢はかなわなかったが、頂点に進む道のりは見えた。やがては、全国制覇という大きな花を咲かせてくれるはずだ。